

Title	イギリスの図書館ネットワーク：英国図書館・イギリスの大学図書館訪問記(2)
Author(s)	呑海, さおり
Citation	静脩 (1999), 36(2): 6-10
Issue Date	1999-10
URL	http://hdl.handle.net/2433/37543
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

イギリスの図書館ネットワーク： 英国図書館・イギリスの大学図書館訪問記 イギリスの大学図書館

附属図書館情報管理課受入掛 呑海 さおり

1. イギリスの大学

イギリスには現在約100の大学があり、バッキンガム大学以外はすべて国立大学です。これらの大学は歴史的に大きく3つに分けられます。

ひとつめは、中世に設立されたオックスフォードやケンブリッジのような伝統的の大学、ふたつめは、ロンドン大学などの19世紀に設立された大学、これらは、伝統的の大学の校舎が石材でできているのに対し、れんがでできていることが多かったため、'Red brick (赤れんが) university'と呼ばれることもあります。そして、第二次世界大戦後の新しい大学創設の波によって設立された大学です。これらは、'the new university'や、その校舎にガラスを多用していることから、'the plate glass (ガラス板) university'と呼ばれています。さらに1990年代の法改正により、専門学校にあたるポリテクニクも現在では大学の地位を得ています。

今回の海外派遣では、大小11の大学図書館を見学することができました。その中から、「伝統的の図書館」としてオックスフォード大学ボドリアン図書館、「赤れんがが大学」として、ロンドン大学インペリアル・カレッジの図書館について報告したいと思います。

2. イギリス政府の最優先政策

「教育、教育、そして教育」が、ブレア政権のスローガンです。将来の経済的成功を支える人材を育成することを目指し、子供達が学習を続けられる良い環境を保持することを、また、あらゆる階層のできるだけ多くの成人に、様々な方法による高等教育の機会を広げることを目的とした政策でもあります。ひとりひとりに教育の機会を広げることによって、社会的な機会の公平化が目指されているのです。

また、情報化時代への対応策としては、2002

年までに、すべての小中高校、専門学校、図書館、大学、博物館、ギャラリーを情報スーパーハイウェイにリンクさせる、'National Grid for Learning' (全国学習ネットワーク) が構築される予定です。

更に政府は2002年までに、生涯教育・高等教育で学ぶ学生数を50万人増やす計画をもっています。過去10年間をふりかえってみても、学生数は劇的に増加しており、現在フルタイムに換算して約150万人の学生が大学で学んでいます。特に、成人学生、パートタイム学生、通信教育学生は急増しており、18歳から22歳までのフルタイム学生の占める割合は、今や学生全体の半分であろうといわれています。アメリカ型の大衆的な高等教育に対して、長らくイギリスの大学は、「小人数エリート型」の高等教育システムであるといわれてきましたが、今大きく変貌を遂げつつあります。

また従来、イギリスでは学生の学費と生活費は、地方教育当局を通じて国費が充てられ、全額公費負担で賄われてきました。ところが、教育改革により、新たに導入された学生ローン制度に基づいて奨学金を受けた学生は、就職後にその返還が求められることになりました。このことにより、学生の「顧客意識」が高まったといえます。

これら学生の質的・量的変化に対応するために、イギリスの大学図書館もその変化を迫られています。

3. 伝統的の大学 - オックスブリッジ

数世紀にわたって、イングランドにはふたつの大学のみが存在していました。オックスフォード大学とケンブリッジ大学です。この二大学の創設は、12世紀に遡ることができます。

「大学の中に町がある」といわれているオックスフォードと、「町の中に大学がある」とい

われているケンブリッジは、共にロンドンから列車で約1時間半程の距離に位置します。この二大学には、オックスブリッジの象徴ともいえるカレッジ制度が残っており、カレッジと学部の一重構造を持っています。学部は国立であり、政府予算で運営されていますが、カレッジは独立採算の私立です。学生は、学部とカレッジの両方に所属することになります。

学部では、主として比較的大人数制の講義が行われ、学部は基本的には講義以外の機能を持ちません。学部もカレッジもそれぞれ独自の建物を所有しており、学部では、学部所属の教員が学部の建物で講義を行っています。

一方カレッジは、勉強・生活・礼拝の場であり、それぞれのカレッジは、図書館、礼拝堂、食堂そしてパブ等をもっています。伝統的に、カレッジが学業と生活の基盤となっており、カレッジの中で専門をこえた教官や学生と接することにより、研究や学習の幅が広がります。また、カレッジでの授業は、オックスフォードではテュートリアル、ケンブリッジではスーパービジョンとよばれる個人授業が中心です。このマンツーマンの密度の高い教育システムによって、教育や研究の高い水準が保たれています。入学試験もカレッジ毎に選考が行われ、カレッジの入試は、各カレッジが全く独自に企画・実行することができます。

4. オックスフォード大学

ボドリアン図書館:Bodleian Library

オックスフォードの地名の由来は、「牛の渡し場」です。テムズ川の中流域、ロンドンの北西約90kmに位置するオックスフォード大学は、30をこえるカレッジを有する総合大学です。

オックスフォードの大学図書館は100以上の図書館で構成されており、次の4つのカテゴリーに分けることができます。

- A. 中央図書館 (The Central libraries)
- B. 学部図書館 (Faculty libraries)
- C. 学科図書館 (Department libraries)
- D. カレッジ図書館 (College libraries)

そのほとんどは、2人あるいはそれ以下のスタッフによる学科図書館やカレッジ図書館です。学部図書館は、主に学部学生を対象としており、学科図書館より大規模です。カレッジ図書館の規模はさまざまですが、主にカレッジのメンバーを対象としています。

最も大きい図書館が中央図書館、そしてイギリス法定納本図書館でもあるボドリアン図書館



ラドクリフ・カメラ

です。ボドリアン図書館は、蔵書冊数633万冊、スタッフ335名、閲覧室29室という大規模図書室です(1998年1月現在)。オールドライブライリー、ラドクリフ図書館(ラドクリフ・カメラ)、ニューライブラリーと下記8つの分館で構成されています。

- A. Radcliffe Science Library
- B. Bodleian Law Library
- C. Rhodes House Library
- D. Indian Japanese Library
- E. Bodleian Japanese Library
- F. Philosophy Library
- G. Oriental Institute Library
- H. Hooke Library

この日案内していただいた Mr. Peter Warren 彼は数年前にボドリアン図書館を退職されたライブラリアンです。との待ち合わせ場所は、ニューライブラリーの前でした。ロンドンのパディントン駅から列車にゆられること約1時間半でオックスフォードに着きます。時間もなかったので、そこからタクシーで行くことにしました。素晴らしい風景がどんどん後ろに流れていきます。町全体が美術館であるかのような美しさです。半ば呆然としながら緑と調和した象牙色の建物に心を奪われているうち

に、タクシーが止まりました。

「ここがニューライブラリーです」。タクシーを降りたものの、どこにも「新しい」建物は見当たりません。待ち合わせの時間が刻々と過ぎてゆきます。あたりを見まわしていると、絵に描いたような英国紳士が目前の建物からでてこられ、声をかけて下さいました。案内役の Mr. Warren でした。どうやら私が道に迷っていないかと心配して外に出てきて下さったようなのです。どう見ても新しい建物を、先入観から認識できなかった自分にあきれると共に、思わず「ここがニューライブラリーですか。」と改めて問わずにはいられませんでした。

ニューライブラリーは、1940年に竣工されています。けれども、オックスフォードで最初の大学図書館が創設されたのが1320年頃、ポドリアン図書館が正式に公開されたのが、1602年であることを思えば、60年の歴史など、なるほど新しいものなのかもしれません。ポドリアン図書館の年譜を紐とくと、「1821年、暖房が導入される」「1928年、照明設備が導入される」など、その歴史を実感することができます。

なにはともあれお茶にしましょうと、案内された喫茶室にも、思わずため息がでてしまいました。14世紀初期に建てられ、コンポジションハウス（大学評議会議事室）に使われていた部屋が喫茶室として使われているのです。雅な曲線と壁の質感に、吸い込まれるようでした。

ラドクリフ・カメラは、八角形のドーム型の図書館で、英国初の円形図書館です。英国図書館新館を設計したウィルソン教授は、「アウラの漂う建物にはいくつかのタイプがある。…本来の機能を果たすことによって神聖さを帯びる建物のタイプもひとつある。偉大な図書館がそれだ。」と述べていますが、まさにそれを具現化したような建物です。ラドクリフ・カメラは、地下道でールドライブラリーとつながっています。地下道に平行して、レールが敷かれており、資料は台車にのせて運ばれます。地下書庫には、可動式書架が使われていました。日本でよく見られるような、レールの上を動く書架ではなく、それぞれの書架の下に車輪がついている、全方向に移動可能な書架です。これで書庫スペースを有効に利用できると説明を受けましたが、地震が多い日本の図書館で書架がきちりと固定されているのとは対照的でした。閲覧室は静謐を極め、先人のさまざまな思惟が空気の中に漂い蓄積されているような気がしまし

た。

ところでこのポドリアン図書館は、イギリスにおける納本図書館のひとつです。日本の納本図書館は国立国会図書館一館のみですが、イギリスには納本図書館が6つ存在し、ポドリアン図書館の他に、英国図書館・ケンブリッジ大学図書館・スコットランド国立図書館・トリニティ・カレッジ図書館・ウェールズ国立図書館がその役目を担っています。伝統的大学の図書館は、過去の遺産をどのように保護し、後世に伝えていくかという課題をもちながら、一方で電子図書館という時代の波に洗われています。ポドリアン図書館も、後述の電子図書館プログラムeLibに参加しています。脚光をあびやすい電子図書館プロジェクトに参加しつつも、「場としての図書館」が、従来とかわらず大切にされているのです。

5. ロンドン大学:University of London

12世紀より数世紀にわたり、イングランドにはオックスフォード大学とケンブリッジ大学の二大学のみが存在していたわけですが、19世紀になり大学改革の必要性が叫ばれるようになりました。両大学は、上層階級と国教会のもので、非上層階級や非国教徒には全く門戸が開かれていないという閉鎖的な大学でした。「広く開かれた大学を」とドイツ諸大学の影響を受けた詩人トマス・カムベルが1824年にロンドン大学創立を提唱したのがその起源で、創設は1836年とされています。

イギリス最大のロンドン大学は、約50のカレッジおよび研究所で構成されています。今回の研修では、インペリアル・カレッジとパークベック・カレッジを見学することができました。

6. ロンドン大学インペリアル・カレッジ:

Imperial College of Science, Technology and Medicine

イギリス理工系三大学のひとつであるインペリアル・カレッジは、1907年に3つの大学が統合され、誕生しました。インペリアル・カレッジは、ロンドン大学の中で理工系の教育・研究を担っていますが、決して他に同じ分野のカレッジがないわけではなく、カレッジ同士の分野は互いにクロスしています。

アカデミック・スタッフ約2,600名、学生数9,000名という規模の大学です。一概には比較

できませんが、京都大学では、アカデミック・スタッフ約2,800名、学生数21,000名ですから、数的にアカデミック・スタッフがいかに充実しているかがよくわかります。



インペリアル・カレッジ中央図書館

また、1997年度のフルタイム学生は8,824名、パートタイム学生は894名でした。1年間で、フルタイム学生は18.9パーセント増、パートタイム学生は37.5パーセント増となっており、比較的パートタイム学生が少ないこのカレッジにおいても、特にパートタイム学生の増加が目立っています。

インペリアル・カレッジには中央図書館をはじめ、24の図書館があります。中央図書館は、近代的な白色が基調の図書館です。上層部はガラス張りになっており、採光が良く考えられた閲覧室が提供されています。閲覧机には、情報コンセントが設けられており、利用者は所有のコンピュータを持ちこんで利用することができます。また、中央図書館では、100以上のデータベースが提供されています。大学の構成員であれば誰でも、学内であればどこからでも、無料で好きなだけデータベースを利用することができます。この規模の大学でこれだけ多数のデータベースを提供できる鍵は、後述するデータセンター等の存在にあります。

また、印象的だったのが、他の大学図書館についてもいえることなのですが、「図書館員の顔」がみえる図書館であるということです。多くの図書館には、図書館員の顔写真と専門分野が掲示されていました。自分自身を利用者の立場においた場合、「図書館」という顔の見えない組織に質問するよりも、自分の求めていることにきちんと答えてくれそうな表情のある図書

館員へ質問する方が、安心感や親しみやすさを得られるのではないかと感じました。

7. 図書館ネットワーク

図書館ネットワークの発達、イギリスの大学図書館の特徴であるといえます。M25コンソーシアムをはじめ、多種の資源を共有するための図書館コンソーシアムが多数存在します。

また、電子図書館プロジェクトもその特徴を色濃く現しています。イギリスでは、1993年に高等教育機関における図書館や情報関連施設についての全国的調査が行われ、「フォレット・レポート」としてまとめられました。ここから電子図書館プログラム構想が生まれ、JISC: Joint Information Systems Committee がその設定と管理を行うことになり、イギリスにおける最大の電子図書館プログラムeLibが誕生しました。JISCとは、イギリスの高等教育機関における情報・図書館政策を決定し、予算を配分する機関です。初めに「電子ジャーナル」や「電子的ドキュメント・デリバリ」などのプログラム・エリアが決定され、それぞれのエリア毎に公募が行われました。その結果、約60のプロジェクトが生まれました。プロジェクトのほとんどは、複数の大学図書館が関与しており、ここに図書館ネットワークの思想がうかがえます。アメリカでは6大学を中心に、日本でも各大学レベルで図書館プロジェクトが進行しているのとは対照的です。

8. CHESTとナショナル・データセンター

イギリスには、JISCの助成を受けて、データベースやソフトウェアの契約を代行するCHESTという機関が存在します。CHESTは高等教育機関に代わって、データベース提供者と契約を結ぶ機関です。各高等教育機関は、直接データベース提供者と契約を結ぶのではなく、このCHESTと契約し、年間使用権を得ます。そして、データベース提供者は、データベースをデータセンターへ納入します。各高等教育機関は、必要なデータベースについて、まずCHESTと契約を結んでから、データセンターで管理されているデータベースを使用するという形になります。マンチェスター大学のMIMASやバース大学のBIDS、エディンバラ大学のEDINAなど、データセンターは複数存在

し、データベースは分散管理されています。例えば前述のインペリアル・カレッジで提供されているデータベースのうち、InspecやCompendexはEDINAを通して利用されています。

このデータベース契約代行機関であるCHESTとデータセンターの存在によって、3つの大きな恩恵がもたらされます。ひとつめは、一括契約及び契約業務の一元化によるコスト削減、ふたつめは、データセンターによる、人的・資源的リソース共有の実現です。そして、これがもっとも重要なのですが、データベース利用機会均等の向上です。高等教育機関の構成員であれば誰でも時間や料金を気にすることなくデータベースを利用することができます。データベース契約や管理に費やすコストが押さえられるため、所属大学による利用権の格差が押さえられるのも大きな利点です。

日本では、各大学が各データベース提供者とそれぞれ契約するという形を取ることが多いため、大学の規模や予算によって契約できるデータベースに格差が生じやすく、また身分によって、利用権に格差がみられるところもあります。イギリスでは、どの大学でも、学生が自由にデータベースを利用できる環境にあるのが印象的でした。

9. おわりに

それぞれの大学が背負う歴史によって、大学図書館は特徴づけられます。蔵書1冊1冊が鎖で書見台につながっていたことからわかるように、かつての大学図書館では資料の「保存」が中心でした。時代の流れとともに、資料の「提供」の重要度が増し、電子図書館時代を迎えた現在ではますますその傾向に拍車がかかっているように思われます。貴重な資料の保存を維持しつつ、最新技術を駆使して資料の提供に努めなければなりません。最も古いものを大切にしながら、最も新しいものに仕えなければならない。歴史が古ければ古いほど大きな宿命を背負うことになります。けれどもまた、大学として新しければ新しいほどより時代の影響を受けやすく、それへの対応を迫られます。その解決策のひとつとして、人的・資源的リソースをあらゆる意味で共有できる図書館ネットワークがいかに大切かということ、海外派遣を通じて実感することができました。図書館ネットワ

ークとは、すなわち人的ネットワークでもありません。

「教育」が最優先政策である国の大学図書館員は、みんなきらきらした目をもっていました。「過渡期であるからおもしろい」彼らはそう言います。同じく変貌を遂げつつある日本の大学図書館にいる私も強くそう思います。

最後になりましたが、この海外研修を通じて、英国図書館のMr. Richard Roman に大変お世話になりました。またその縁で、今年5月に附属図書館でご講演頂くことが出来ました。各図書館でご案内頂きました図書館員の方々、このような素晴らしい機会を与えて下さったたくさんの方々に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

(どんかい さおり)